

## 気仙沼市小泉海岸の貝類相の特性と保全の必要性

山下博由（貝類多様性研究所）

2014年9月20・21日の小泉海岸の調査によって、別表のように二枚貝綱39種・腹足綱（巻貝類）53種、合計92種の貝類が記録された。多くは殻による記録であるが、貝殻の鮮度や量によって、生息状況の判断も示した。

小泉海岸の貝類相は、東北以北に分布の中心がある冷帯系種と、日本本州～中国大陸沿岸に分布の中心ある温帯系種で構成されている。種数では温帯系種が多いが、ユキノカサが最も優占しており、冷帯系種の卓越が大きな特徴である。砂浜海岸であるが、イガイ類・カサガイ類・ニシキウズ科・チヂミボラ、腕足動物のタテスジホオズキガイなど、岩礫底に生息する種の量が多く、沖合いの海底に岩礫地が発達していることが予測される。これには、津波による瓦礫の流れ込みが関係している可能性がある。砂浜に特徴的な種としては、ヒメバカガイ・ウバガイ・チョウセンハマグリ・キサゴ・タマガイ類・ホタルガイ・ムシボタルなどが確認されたが、ウバガイ以外の産出は貧弱で、砂浜の生態系は弱体化している可能性がある。これは、ほぼ全国的に見られる傾向で、例えばホタルガイは多くの地域で減少傾向にある。

チョウセンハマグリは、東南アジアまで分布する温帯～熱帯種であり、岩手～宮城県は太平洋での北限の分布域である。気仙沼市の大谷海岸周辺は、チョウセンハマグリの高貴な生息地であったが、近年は生息情報がない。小泉海岸では古い殻しか確認されず、現在生息している可能性は低いと考えられた。

表に示したように、小泉海岸では、環境省と宮城県のレッドリストに掲載された9種の貝類（イガイ・イタボガキ・サビシラトリ・ヒメシラトリ・ミルクイ・ニオガイ・マルタニシ・ウミニナ・クビキレガイモドキ）が確認された。このうち、イタボガキはごく古い殻しか確認されず、数十年前に絶滅していると考えられる。サビシラトリ・ヒメシラトリ・ウミニナは、津谷川の汽水域に生息している可能性があるが、調査できていない。クビキレガイモドキは冷帯系種であるが、宮城県が南限の分布域である。今回、新鮮な殻1個体が採集された。本種はアマモの堆積があるような海岸の打ち上げ帯に生息するが、小泉海岸周辺での生息状況の詳細な調査が望まれる。ミルクイは新鮮な殻が複数確認され、沖合いに生息していると考えられる。ミルクイは「本みる」「黒みる」の名で呼ばれる高級食材であるが、全国的に著しく減少しており、個体群も少ない。イガイも食用種であるが、全国的に減少傾向が強く、宮城県レッドリストでは情報不足とされている。小泉海岸では、比較的多く確認された。ニオガイは泥岩に穿孔した個体が多く確認された。また、淡水種のマルタニシの漂着が確認され、小泉地区の平野部に生息している可能性が示唆された。マルタニシも減少傾向が強く、環境省レッドリストで絶滅危惧II類と重い評価になっている。

以下に、小泉海岸の貝類相の特性と保全上の提言をまとめる。

1. 小泉海岸の貝類相は、冷帯系種と温帯系種で構成されており、生物地理学的に複雑な構成を持っている。例えば、クビキレガイモドキの南限と、チョウセンハマグリ of 北限は、この海域で接している。こうした三陸海岸一帯の「混合的な」生物群集、生物相の複雑さは、水産資源の豊かさに繋がるものとして、重要視される必要がある。

2. 環境省・宮城県のレッドリストに掲載されている 9 種の貝類（イガイ・イタボガキ・サビシラトリ・ヒメシラトリ・ミルクイ・ニオガイ・マルタニシ・ウミニナ・クビキレガイモドキ）の産出が確認された。小泉海岸周辺では、平野部の淡水域から津谷川汽水域、海岸から沖合いにかけてこうした希少種が分布している可能性があり、詳細な生息状況の確認が必要である。防潮堤工事に際して、環境影響評価が適用されないとしても、生物多様性の保全や希少種の保護の必要性は、国・県の関連法令・条令から明らかである。これらの種の生息状況の調査、工事による影響の検討を求める。

3. 水産有用種・漁業資源として、イガイ・ミルクイ・チョウセンハマグリは、生息状況の調査、個体群の保全や復活を検討する必要がある。これらの種は特産物としての経済的価値を潜在的に有している。

4. 全国的に砂浜生態系が劣化・喪失し続けている今日、小泉海岸の砂浜生態系は貴重なものとみなされる。短時間に 100 種近い貝類が確認されるような砂浜は、東北地方には少なく、環境教育の場としての活用も期待される。

5. 大規模な防潮堤は、陸域からの栄養塩・有機物の海への供給を阻害し、漁場の弱体化を招く可能性がある。防潮堤の生態系への影響を十分に検討し、基幹産業としての漁業を軽視した政策がとられないよう提言する。